新撰歌枕名寄

下

黒田彰子編

古典文庫

黒田彰子編

新撰九寄

下

江苏工业学院图书馆
藏书章

古典文庫

古典文庫第五一四冊

平成元年九月二十日印刷発行　非売品

新撰歌枕名寄　下

編者　黒田彰子
発行者　吉田幸一
印刷者　白橋印刷所

発行所　114　東京都北区西ケ原三ノ三四ノ一二
古典文庫
電話（九一〇）二七一一七
振替口座東京九・一四五九七番

© KOTEN BUNKO, 1989. Printed in Japan

新撰歌枕名寄　下

水府明徳会彰考館蔵

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongb

新撰哥枕名寄巻第四

近江国

逢坂

2018 古 恋々しくてまれに今夜そ逢坂の夕付鳥は鳴すもあらなむ　読人不知

2019 新 相坂をこえたにはてぬ秋風に末こそおもへ白川のせき　寂蓮

2020 詞 あふ坂の杉間の月のなかりせはいくきの駒といかてしらまし　匡房

2021 堀 逢坂の杉の村たち引程はおふちに見ゆる望月の駒　河内

2022 拾 相坂を今朝こえ来れは山人の千年つけとて切れる杖なり

2023 六帖 はな千鳥跡たへぬれはあふ坂のふみたかへたる心ちこそすれ

2024 万 逢坂を打出てみれは近江の海しらゆふ花に波たちわたる

2025 あふ坂のゆふつけ鳥にあらはこそ君か往来をなく〳〵も見め

2026 あふ坂の木の下露にぬれしより我衣手は今そかはかぬ

同山

2027 わきもこか相坂山のしのすゝきほには出すて恋わたるかな　読人不知

2028 名にしほはゝあふ坂山のさねかつら人にしられて来るよしもかな　三条右大臣

2029 春にいま相坂山のいわし水木かくれいつる鶯のこゑ　家隆卿

2030 堀 鳴なるはあふ坂山のくつわむし駒迎する人や聞らむ　師時

2031 六帖 逢坂の山の嶺にて鳴声はましらのみこそ哀なりける

2032 古 君か代にあふ坂山の石清水木かくれたるとおもひけるかな

2033 夫木 鳥居たつ逢坂山のさかひなる手向の神よ我ないさめそ　仲正

2034 夫木 紅葉はを関守神に手向置て相坂山を過る木枯　権中納言実子

同関

2035 夫木 今日ひける駒はのりこそかしこけれ仏の道に逢坂の関　季経卿

2036 後拾 陸奥の足立の駒はなつめとも今日相坂の関まてはきぬ　源胤法師

2037 夫木 越はやな東路とをきひたち帯のかことはかりの相坂の関　俊綱

2038 あふ坂の関をや春の越つらむ音羽の山の今朝はかすめる　衣笠

2039 続拾 相坂の関の杉村雪消て道ある御代と春は来にけり

2040 伊勢物語歟 かち人のわたれとぬれぬゑにしあれは又逢坂の関は越なん

2041 六帖 千 あふさかの山時鳥名乗なる関守神や空にとふらむ　師時

2042 建保 逢坂のせきの杉間に引なるはこや望月のかけふちの駒　家隆卿

2043 堀 あふ坂の関の庵りの琴の音にふるき梢の松風そふく　家隆卿

2044 千 有明の月も清水にやとりけり今夜は越し逢坂の関　範永

2045 拾 相坂の関の岩かとふみならし山たち出るきり原の駒　高遠

2046 関の戸に尾はなあしけの見えつるはほさかの駒を引にや有覧　隆源

此哥、逢坂の関をよめるといへり

2047 逢坂の山桜戸の関守は人やりもせぬ花や見るらん　家隆

2048 あふ坂の関の山風身にしみて鳥の名たての音をそ鳴ける　道信

2049 せはくともわらやの軒にたちよらん夕立むかふ逢坂の関　中務卿

2050 堀 相坂の関のせきもり出てみよむまやつたひのすゝきこゆなり　匡房

2051 千 あまたゝひゆく相坂の関の水今は限の陰そかなしき　東三条院

2052 後拾 逢坂の関になかるゝ岩清水いはて心におもひこそすれ　読人不知

2053 霜ふれとさかへこそませ君か代にあふ坂山の関の杉村

2054 相坂の梢の花を吹からに嵐そかすむ関の杉むら

2055 后拾 夜をこめて鳥の空音ははかるともよに相坂の関はゆるさし

2056 是や此行もかへるも別てはしるもしらぬも逢坂の関　蟬丸

2057 拾 相坂のせきの清水に影見えて今や引らむもち月の駒　貫之

2058 あふ坂の関とはきけとはしり井の水をはえこそ留さりけれ　堀川左大臣

2059 続古 逢坂の関の嵐のはけしきにしいてそいたる世をすてんとて　蟬丸

2060 あふ坂の名をもたのまし恋すれは関の清水に袖はぬれけり

2061 相坂のせきふみならす旅人の渡れとぬれぬ花の白浪　成仲

2062 千 逢坂の関には人もなかりけり岩間の水のもるにまかせて　能宣

同関山

2063 万十五 我身こそせき山こえて爰にあらめ心はいもによりにし物を

2064 后拾 関山のせきの杉村過行とあふみはなをやはるけかる覧（峯・岩）

同関河

2065 金 音羽山紅葉散にし逢坂の関の小河ににしきおりかく　俊頼

2066 寛平菊合 この花にはな咲ぬらし関河のたえすもみよとおる錦哉

2067 拾 はしり井のほとししらはや逢坂の関河こゆる夕かけの駒　元輔

同走井

2068 堀 はしり井のかけひの水はたなひけと長閑に見ゆる望月の駒　俊頼

椙杜

2069 霜ふれとさかへこそませ君か代の逢坂山の関の椙もり

近江海

2070 万三 近江の海夕浪千鳥なかなけは心もしのにいにしゑおもほゆ

2071 さゝ浪や近江の海のあしろ木に浪とともにやひほはよる覧

2072 みるめこそ近江の海にかたからめ吹たにかよへしかの浦風　伊勢大輔

丹穂海

2073 にをの海や霞のうちにこく船の真帆にも春の気色なるかな　式子内親王

湖

2074 拾 みつ海に秋の山へをうつしてははたはりひろき錦とそみる　観法師（観教・岩）

丹穂海

2075 嶺たかきこの山本にかけくれて夕日のこれるにほのうら浪　為家

勢田渡

2076 近江の海せたのわたりにかつくとりめにも見えねはいきとほるしも

2077 近江の海勢田の渡にかつく鳥田上過て宇治に年へつ

同河

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

2078 田上やせたの河瀬にやなさしてよるとしなれはうきねをそする　好忠

同橋

2079 行月のかゝみの山や深ぬらん音すみわたる瀬田の長橋　能因法師

2080 新 真木の板も苔むすはかり成にけり幾代経ぬらんせたの長橋　匡房

2081 にほてるや矢橋のわたりする舟の幾千度かみつ勢田の橋守　兼昌

同中道

2082 もち月の駒引わたすこゑすなりせたの中道はしもとゝろに

同里

2083 勢田の里はしのこまふみ朽めおほえそこのなみたそ面影にたつ　俊頼

打出浜

2084 逢坂をうちいてゝこれは（見・岩）近江の海しらゆふ花に波立わたる

2085 春の浪打出の浜のはまかせに花のふゝきの志賀の山越　慈鎮

2086 あふみなる打出の浜の打出てうらみやせまし人の心を

奥津島

2087 おきつ島しまもる神やいさむらん波もさわかすわからかへのさて

2088 家集 近江の海おきつしま山をくまちて我おもふいもかことのしけくも

2089 万十一 桜さく奥津島山見わたせは浪にかゝれる花の白雲　伊忠

野島　勅撰名所和哥要抄ニ被入之

2090 読後 世とともに哀しほるゝたもとかな野島の海士の袖もからぬを　親盛

2091 万 近江路の野島か崎の浜風に妹か結しひも吹かへす　人丸

志賀

2092 千 嵐吹しかの山辺の桜花散れは雲居にさゝ浪そたつ

2093 六帖 さゝ浪や志賀の山路のつゝらをり来る人絶てあれやしぬ覧　公行

2094 志賀の山嵐のつてに紅葉はを誰(お・岩)をもわすに見て忍ふらん

2095 またしらぬ人とともにそ越にける志賀の山みち跡もなけれは

2096 千 春風にしかの山越花散れは嶺にそ浦の浪は立けり　参議親高

2097 声たえて夜行志賀の山川に妻よひかねて鴛そ鳴なる　家隆

同浦

2098 しかの浦に五色の浪のたつ時は鷲の高根の月をこそみれ

2099 さゝなみやしかのみつ海見渡せは霞にしつむ奥津島山

2100 さくらさく比良の山風吹からに花になり行しかのうら浪　后京極摂政

2101 しかの浦に花のさゝ浪こき分てつりする海士や袖匂ふらん　寂蓮

2102 志賀のうらやしはし時雨の雲なから雪に成行山の下風　慈鎮

2103 しかの浦の五の色の波たてゝあまくたりける古のあと　同

2104 夏の日をみそきにしつるしかの浦に秋をむかへる浪の音哉　寂蓮

2105 丹穂（建仁哥合）てるや入江のあしの葉はふして蛍みたるゝしかのうら風　景頼

2106 しかの海やいつくを霧のへたつらん浪より出る有明の月　通具

2107 さゝ浪やしかの浜松ふりにけりたか代にひける子日成らん　俊成

2108 昨日（千）まて御手洗河にせし御祓しかの浦たちそかわれる　八条大政大臣

2109 新 しかの浦や遠さかり行浪間よりこほりて出る有明の月　家隆卿

2110 しかの浦や蛍とひかふ波間より水に先たつほしあひの空

2111 いにしえの鶴の林とちる花の匂ひをよするしかのうら風　后京極

2112 続古 春風に幾重の氷今朝とけてよせぬに帰るしかのうら浪　後鳥羽院

2113 后拾 さ夜ふくるまゝにけやこほるらん遠さかるなるしかの浦波　快覚

同都　付故郷

2114 さゝ波や国つかみ（み神・岩）の浦さひてふるき都に月ひとりすむ　法性寺入道

2115 いにしえの人に我あるやさゝ波の古き都をみれはかなしき

2116 拾 さゝ波や大津（あふみイ）の宮は名のみして霞たなひく宮木守なし　人丸

2117 あれにけりしかの故郷秋をへて住人稀に打衣かな

2118 あれぬとてしかの都を山里にたれ住なして衣打覧

2119 橘の花やはもとの花ならむ香こそ昔のしかのふるさと

2120 さゝ浪やしかの都はあれにしを昔なからの山桜かな

抑さゝ波と云事は、日本記云く、天智天皇粟津の宮にましまし時、仏事建立の御志ありて、勝地を求給ふに、六年の二月三日の夜の御夢に、沙門来て奏曰、乾の山に霊崛あり。早見給ふへしと云々。帝驚て後花その山を見給ふに、大なる光り立のほれり。人を遣して尋給ふに、御使帰り奏云、光に当れる処に、小山寺并滝水あり。又一人の優婆塞有て、経行念誦す。その謂を問に、敢不答。其採行を見るに奇特のものと云つへし。帝其処に幸し給ふに、むはそく出向奉る。その山の名を問給ふに、古仏霊伏蔵地佐名実長等山と云て失ぬ。則其処に伽藍をたてらる。今の崇福寺是なり。天皇無名指を切て石箱にいれ、入燈採の本に埋み給ふ。参議兼兵部卿正四位下橘朝臣奈良麻呂、天平勝宝八年二月十一日始て此寺に法会を行き。それより今に至るまて、橘氏の輩（参詣て・岩）まふてし行しむと云へり。されはさゝ波しかとのみよめる事、此心にて侍るに、さゝ波長等とも、さゝ波大津とも、さゝ浪の国とも読り。されは、近江の国の内は、いつ

くにもくるしかるましきにや。さゝ波と云る事は、一国の惣名のよし申説とも多。然れは、何国にも近江にはよむへきか。されともかやうの事は先達のよみならわせるを本として侍るよし見え侍り。此事に不可限者哉

同花園

2121 さゝ波やしかのはなそのまれにたに昔の人の心をそしる　成仲

2122 明日からはしかの花園まれにたに誰かはとわん春の故郷　后京極

2123 荒にけりしかの花その冬くれは所もわかぬ雪の故郷　為家

2124 ふりにける跡とも今朝は見えぬかなしかの都の雪の花園

長等山

2125 おもわさりきいのちなからの山の端にたひ〳〵のりの花をみんとは　慈鎮

2126 たのめをく人もなからの山の端にさよふけかたは松風のこゑ　長明

2127 建保かりかねはおなし長良の山越て帰るもつらし志賀の浦浪　範忠

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb